教職科目 B，社会科（地理歴史科）教育法Ⅰ
担当教員：福田　喜彦

「社会科（地理歴史科）教育法Ⅰ」でのＦＤ活動への取り組み

社会科教育講座・福田　喜彦

１．本授業の目的とその概要

本授業は，中学校（社会科）・高等学校（地理歴史科）の教員免許状取得に必要な科目であり，中学校社会科（地理的分野・歴史的分野），高等学校地理歴史科の歴史，内容構成，授業構成について理解することを目的としている。そのため，本授業では，到達目標として，以下の３点を設定した。①中学校社会科，高等学校地理歴史科の歴史や内容を説明することができる，②中学校社会科，高等学校地理歴史科の授業を分析，評価することができる，③中学校社会科，高等学校地理歴史科の実践上の諸問題について，自分の考えをまとめ，論述できる。こうした目標を達成するために，本授業は以下のような形で授業を進めた。前半では，社会科教育学の視点から社会科教師に求められる資質や能力，新しい学習指導要領の内容を解説し，これまでの理論的な研究成果を踏まえた社会科授業の原理について考察した。中盤では，愛媛県における社会科教育の現状と課題を実地指導講師（中学校教員）の講義を通して学習した。それによって，社会科授業の実践上の課題や授業作りのポイントを教育現場の視点から検証し，教材研究や授業実践に生かすことができるようにした。そして，後半では，理論的・実践的な立場を総括しながら，学生たちが主体的に教材研究や学習指導案づくりに取り組むことで，よりよい社会科授業を構想し，授業展開ができるようにした。

２．小レポート課題の設定とテーマへの理解度

本授業では，社会科の授業デザインができるように様々な課題を設定してテーマへの理解度を図っていった。本授業で取り上げた小レポート課題の解答からいくつかの事例を考察してみたい。

Ａさんは，社会科の単元と各授業をどう組織的に関連づけていくかという課題を見出している。「指導案として作成した授業を独立してとらえ，一連の授業の中の一授業という認識が最も不足していた。それに伴って，資料を多用しすぎ，内容が曖昧なものとなってしまった。まず，一連の授業であることを意識し，前後の流れを考えた上で指導案の作成を行えば，内容を絞り込めると思う」（法文・人文・２回生・Ａさん）

Ｂさんは，授業間の関連性に着目し，前後の授業の流れをどのように展開するかを考えている。「工夫すべき点は，授業の流れだったと思います。ちょっとだけ詰め込み過ぎていて，無理矢理産業とつなげようとしていたので，気候と農業のみに断定して，ゆっくりとして授業展開をすべきだと感じました。また，アメリカ農業の特徴である「センターピボット」や「等高線耕作」なども授業の途中に組み入れると，より印象づけられ，つまらなくない授業になったと思います」（法文・総合政策・２回生・Ｂさん）

Ｃさんは，効果的な視聴覚教材に触れ，教具の利用方法も重要な点であることを指摘している。「まず工夫して視覚的資料を使えなかったと思う。わかりやすさだけを追求して復習さえできたらよいという感じの流れになってしまった。まったく理解できていない子向けの授業内容で，つまりわかる子はおもしろくない無味乾燥な授業感がでてしまったので，もう少し，創造力を生かすように視聴覚的資料と問題を用いながら，流れをつくりたい」(教育・学校教育・２回生・Ｃさん)

Ｄさんは，生徒の主体的な学習を促すために，生徒の知識と発問の関係について検討している。「中学校の 50 分の授業で貿易・気候・地形などを合わせて理解させるのは難しいと感じた。このことを改善するために，まず，一つの授業で，貿易にポイントをしぼり，資料を使って日本と世界の国々の貿易関係について学ぶ。また，生徒の知識を関連させることができるような発問を出し，生徒が主体的な学習ができるようにする。次の授業で前回の授業で特徴のあった国を取り上げ，その国の気候や産業について学習する」（教育・総合人間・２回生・Ｄさん）

このような課題を省察しながら，最終レポート課題では，本講義の内容をふまえて，各自で新たなテーマを掲げた社会科学習指導案を作成した。

３．本授業に対する学生の意見と改善への視座

本授業を受講した学生からは次のような意見が出された。以下，いくつか事例をあげてみたい。

「今回，中学校の地理的分野の学習指導案を作成してみて，授業をつくるのは大変なことだと実感した。毎回，このような指導案を作成している現場の教師はすごいと思った。今まで受けて来た，中学校や高校の社会科の授業はなんとなく受けていて，教科書に載っていることを授業でしているだけだと思っていた。しかし，実際には教科書の内容を教えるにあたって，たくさんの準備が必要であり，そのために教師が教材研究を行い，時間をかけて授業の準備をしているのがわかった。子どもたちを積極的・意欲的に授業に参加させるためには，工夫が必要である。ただ授業をするだけでなく，資料を効果的に利用して視覚的に子どもに訴えたり，子どもが興味をもつような発問をしたりするなどの授業作りが大切だと感じた」（教育・総合人間・2回生・Eさん）

「社会科（地理歴史科）教育法Ｉを受けるにあたって，それ以前に現職の教師の方の指導案を自分なりに改善するということはしたのですが，それはあくまで指導案の改善だけだったので，単元設定の理由や教材の解釈，評価の観点なども考えなければならなかった今回の課題は初めての取り組みで，学習指導要領の文言をそのまま引用したりもしましたが，しかし，自分なりの設定理由や教材解釈，評価の観点を考えて取り入れることができたので，これから教師になった場合を考えるととても勉強になり，まだまだ改善の余地はたくさんあるなと感じました」（法文・総合政策・3回生・Fさん）

「今回，指導案を作成して思ったことは，「とにかく難しい。どうしたら分かりやすい授業になるのか，本当にこの構成でいいのか，など考えるときりがない。」ということである。また，筆者が「こういう授業なら受けたかった」という観点から作成していったため，筆者の好みに寄りすぎてしまった気がする。ある程度レポートを作成しているときに気づいたため，それをいかに正当化（しっかりとした教材ですよ，と言い張る）できるかどうかが，個人的に最大の問題となってしまった。疑問点としては，評価というものが教員個人で決定できるものなのか，周りの教員で示し合わせて決定するものなのか，学校全体で決まっているものなのか，ということである。評価については授業プリントの指摘にある通り，筆者も高校生の頃は試験のための勉強，とりわけセンター試験のための勉強を行っていた。社会科（地歴科）に限らず，すべての教科においていえることである。評価の問題点の解消は，教員による努力も必要であるが，それ以上に入試システムを改善することが必要だと思う。」（法文・人文・2 回生・Gさん）

「社会科を教える上で必ず問題となるのは歴史が「過去の出来事」だということであると思う。これが理系科目なら実験などを通し，知識を獲得するまでの課程を追体験することができる。そこで得た知識は実験を通して自ら経験した知識としてリアリティを伴って生徒に体得されるに違いない。しかし，社会科で取り上げる歴史的事象は直接時間を遡って経験することは不可能であるし，決まりきった過去の出来事の中に実験や観察といった好奇心をくすぐる要素が少なくないと思われがちである。そのため，社会科の授業と言えば教科書に沿った通史的な説明と，タームの暗記に終始してしまう傾向にあるのではないだろうか。しかし，社会科において「何を学習させるのか」という目標を明確にすることで指導の内容が大きく変化することが本講義およびレポートの作成を通して理解できた」（法文・科目等履修生・Hさん）

「この学習授業案のレポートを作成するにあたって，まず生徒の立場だったらこの項目は分かりやすいのかといったような，生徒の立場で物事を考えることは必要だったし，同時に教育する側として，押さえておかなければならないポイントや，教えたいことをその中に盛り込まなければならなかった。私が今まで習ってきた先生は，毎回このような指導案を作成し，授業を行っていたのだと考えると，改めて教師の責任感と同時にやりがいを感じた。ただでさえ，授業を行うのは大変なことであるし，多くの生徒がいる中で理解させないといけない。また工夫のある授業ということであるから教師に求められることは多い。実際の，教育現場では，何回も授業を重ねるごとに，それがわかりやすくなるのであろうが，ベテラン教師といわれる教師でも，この学習指導案というのは気を使う部分ではないだろうか。このように一つの授業の中にも教師の労力というのは，大変なものであるということを改めて考えさせられた」（法文・総合政策・2回生・Iさん）

４．本授業の総括と次年度へ向けた課題

以上，学生から出された意見も踏まえ，新たな知見が提供できるよう今後も授業を改善したい。